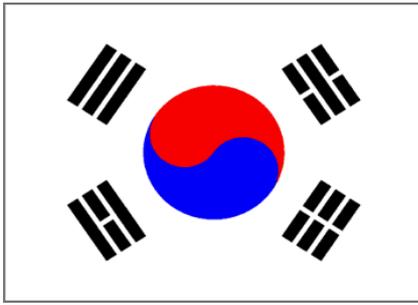


ソウル日本人学校 実践報告



札幌市立緑丘小学校
教諭 黒田 洋子

1. 大韓民国について

国土は、約10万平方キロメートルで、朝鮮半島全体の45%を占める。日本の4分の1ほどの広さである。人口は、約5,150万人で、ソウル首都圏には人口5千万人の約半数が居住し、世界の都市圏人口の順位は第5位である。ソウル市内のどこの地区に行っても、人込みと遭遇するのは、このためであると納得した。

言語は、歴史的な背景もあり、中国や日本の影響を色濃く残す言葉もあるが、朝鮮王朝における最高の聖君と評価されている世宗大王が創製を行い、1446年に公布されたハングル（訓民正音）が用いられている。

2. ソウル日本人学校の概要と教育

ソウル日本人学校は、大韓民国にあり、文部科学省より認定されている二つの日本人学校（ソウル・プサン）のうちの一つである。ソウル在住の日本人駐在員の間で日本人学校設立の気運が高まり1972年に創立された。当初は龍山区漢南洞（ヨンサンクカンナムドン）のビルを使用していたが、1980年に江南区開浦洞（カンナムク・ケポドン）に校舎を建設。江南区開浦洞の校舎の老朽化にともなう2010年9月14日、麻浦区上岩洞（サンアムドン）のデジタルメディアシティ（DMC）内の外国人学校用地に前年から建設していた新校舎（5階建て鉄筋コンクリート）が竣工し、開浦洞から移転して、同年の9月27日からは新校舎での授業を開始した。

ソウル日本人学校は、在韓日本国大使館と韓国政府の間で正式文書が取り交わされ、韓国文教部・外務部より私立各種学校として認可されている。幼稚部・小学部・中学部の三部から構成されており、児童生徒は市内各地域から通学しており、通学バスを利用している子どもも数多くいる。

原則として日本国籍所持者、あるいは日本に永住資格をもつ外国人で、将来日本へ帰国することが確かなことを証明できる子女のみが入学を許される（日本国籍者でも韓国に永住する場合は原則入学を許可されない）。それ以外の場合は、必要書類を提出した上で月1回開催される学校運営委員会の審査の結果、入学の可否が決まるという厳しいルールで決定している。



～正面 エントランス～



～校舎 グラウンドより

～

<異文化・多文化コミュニケーション>

教育課程は文部科学省の学習指導要領を基準としており、海外校の特色を加味するために、小中学部では週1時間の**韓国語の時間**を、また幼稚部から中学部3年生まで週1時間の**英会話の授業**を特設している。韓国語に関しては、低学年は「ねこ」と「うさぎ」の2コースに分け、韓国語に親しむことができるようにしており、中学年からは初級、中級、上級に分け、レベル別に学習している。上級レベルは、日本語を一切使わない学習となっている。英会話もレベル別で学習する形態をとっている。

<現地理解教育>

～現地校との年2回の交流（春・秋）～

各学年、韓国現地校との交流学習を行っている。春は、日本人学校に招いて、各学年に応じて日本の文化の紹介や学習の体験、学校施設の案内を行う。各学年には、バイリンガルに韓国語を話す児童生徒がいるため、教師の通訳がつくものの、児童生徒が直接コミュニケーションをとって活動する姿が見られる。秋は、現地の学校を訪れ、一緒に韓国の遊びなどをして交流を深める活動を行った。

小学部……………上芝（サンジ）小、ハヌル小、上岩（サンアム）小、方現（バンヒョン）小、新龍山（シンヨンサン）小との交流学習

中学部……………善一（ソンイル）中、隣接するインターナショナルスクール Dwight International School との交流学習



小5 新龍山小学校（シンヨンサン）との春・秋の交流
～両国旗を持っての見送り風景（日本人学校にて）～



～校外学習～

小学部……………下学年遠足（1～3年生）、上岩洞探検、二村洞探検、消防署見学、浄水場見学
宿泊学習、とびだせソウル探検隊、工場見学、国立博物館見学、修学旅行等

中学部……………ソウル市内校外学習、福祉体験学習、職場体験学習

修学旅行（※釜山日本人学校との交流）等

<夢先生>

元サッカー選手の北澤豪選手が、「夢先生」としてソウル日本人学校に来校した。航空会社協賛の活動で、児童と体育館で一緒に活動して触れ合い、北澤選手がどのように努力してきたか、夢をもつことなどの講話をしてくださるという取り組みであった。こういった日本国内では出来ない体験を数多く経験できた。



<日韓国交 50 周年記念事業>

2015年に「日韓国交正常化 50 周年」を迎え、児童レベルでの文化交流をしたいとの在大韓民国日本大使館からの打診があり、合唱団を組織するプロジェクトがスタートした。韓国側は、海外遠征経験もあるソウル市少年少女合唱団であるのに対し、日本人学校側は、合唱に関して未経験な高学年の有志 30 名ほどであったので、音楽専科講師の協力を得ながらの練習を行った。両国の童謡から 2 曲ずつ、合同で歌う曲 1 曲であり、全 5 曲を日本語と韓国語で歌えるようにすることで合意した。日本の童謡は、「ふるさと」「おもちゃのチャチャチャ」が選ばれた。

第 1 回目の発表は、経団連、日本商工会議所が中心となって開催された韓日経済人会議のレセプションであった。300 名を超える政財界の来賓の前で歌うということで緊張した児童であったが、大きな場に慣れている少年少女合唱団のリードにより無事に発表を終えた。

第 2 回目の発表は、50 年前に締結された日韓基本条約調印を記念して日本と韓国双方で同時に開催された「日韓国交正常化 50 周年記念祝賀行事」での合唱披露であった。式典では、前朴槿恵大統領も出席し盛大なものとなった。

第 3 回目の発表は、2005 年の日韓国交正常化 40 周年を記念して「日韓友情年」に始まり、それ以降日韓友好関係の増進を目的に開催されている、日韓最大の民間交流行事である「日韓交流お祭り」であった。会場がオープン化されていたため、息の合った惹きつける合唱を発表することができた。

第 4 回目は、「日・中・韓 3 か国首脳会談」の場である。日本の安倍晋三首相、韓国の朴槿恵大統領、中国の李克強首相によるトップ会談の歓迎晩餐会のオープニングの場であった。国立現代美術館という会場の規模によるセキュリティと 3 か国の児童を集める関係上、5 年生の児童 5 名を選抜し参加した。

セキュリティが厳しく、引率者の私たちも入場制限があったが、子どもたちからは、「テーブルが近くて聴いている人の表情が良く分かった。」とのコメントが聞かれた。



左・日中韓合同練習風景
中・首相が着席する演壇
右・子どもたちの寸法に
仕立てられた着物

3. 現地理解を通して ～教育実践～

<事件・事故>

私が韓国に派遣されていた2014年度から2016年度までに、韓国内で起きた事件や出来事が多くあった。その中の二つの出来事を取り上げる。

○セウォル号沈没事故（2014年）

2014年4月16日、[韓国仁川](#)の仁川港から[済州島](#)へ向かっていた大型旅客船「セウォル」が、[観梅島](#)（クァンメド）沖海上で転覆し、沈没した。事故が発生したセウォルは、[修学旅行中の安山市の檀園（タヌオン）高等学校](#)2年生325人と引率教員14人の他、一般客108人、乗務員29人の計476名が乗船していた。[大韓民国国立海洋調査院](#)によると、現場周辺は水深27m - 50mで目立った暗礁はなく、16日午前時点で視界は良好、波高約1mと、航行の安全に影響するような自然条件はなかったとされるが、乗員・乗客の死者299人、行方不明者5人、捜索作業員の死者8人という犠牲者数は、同国での海難事故としては、21年ぶりの大惨事となった。韓国では、2013年まで10代の死因1位は[自殺](#)であったが、この事故により高校生が多数亡くなったため、2014年の10代の死因1位は運輸事故となってしまった。

○MERS 中東呼吸器症候群（MERS：マーズ）（2015年）コロナウイルス

最初の感染者は、2015年[4月29日](#)から[5月3日](#)まで中東地域に出張後、5月4日に[仁川国際空港](#)を通じて帰国した68歳の男性であった。11日に発症し、5月15日から17日の間に平沢聖母病院に入院し、20日にMERSと確定された。元々一つだった病室を二つに分割したことで排気口が8103号室のみにしか存在せず、初の感染者が入院していた8104号室には排気口が存在しなかった。当初、韓国防疫当局は[WHO](#)のガイドラインに基づき2m以内の密接接触者のみを監視対象としていたが、結果的には8階の滞在者に感染が広がった。

二次感染

最初の感染者が隔離された翌日、最初の感染者を看護していた63歳の妻にも呼吸器症状が現れ、遺伝子診断検査の結果、感染者数は2人に増えた。さらに、最初の感染者と同じ2人部屋に入院していた70代の男性も20日午前から発熱症状が現れ、同じく検査を行ったところ、感染が確定され、感染者が3人に増えた。

感染の拡大

5月26日、第3の感染者に接触し、隔離対象である44歳の息子が、[アジアナ航空](#)723便（乗員乗客166名）で[香港](#)へと飛んだ。[香港国際空港](#)到着時に[発熱](#)があり[咳](#)をしていたため、[検疫官](#)が「MERS患者と接触したか」と尋ねたが、これを否定した。27日、中央防疫対策本部は[中国](#)に出国した事実を確認し、国際保健規則の規定に基づき、[WHO](#)西太平洋地域事務所と中国保健当局に知らせた。

5月27日には平沢聖母（ピョンテクソンモ）病院で感染した14番目の患者の35歳男性が[ソウル市](#)の[サムスンソウル病院](#)に入院したことで、同病院内での院内感染が起こった。この男性は平沢聖母病院で最初の感染者と同じ病棟に入院しており、発熱したため平沢市内の別の病院に入院したのちバスでソウル市に移動し、サムスンソウル病院に搬送されていた。

6月2日の時点で、韓国で死者2人を含む25人が感染しており、3次感染者も出始めている。

6月11日に死者が10人を超え、感染者も100人を突破、4次感染者が初めて確認された。

6月14日には釜山で初の死者が出た。

終息の延期

10月12日、韓国保健福祉省が、MERS患者のうち最後に陰性判定を受けた35歳の男性と接触した家族や医療関係者など61人も隔離措置が取られた。これにより10月29日にWHOから発表される予定であった終息宣言が延期となった。11月25日、悪性リンパ腫を患っていた前述の35歳男性が死亡し、これにより韓国国内で陽性反応を示す患者がいなくなった。

<宿泊学習>

派遣、初年度と2年目は、第5学年を担当した。5学年は、宿泊学習があるため、2014年度派遣されてすぐに宿泊学習の下見に出向き、計画がすすめられた。しかし、前述したが、4月16日に起こったセウォル号転覆事故のため韓国全土が喪に服し、特に、修学旅行中の高校生が多く亡くなったため遺族や韓国国民の悲しみは計り知れず、毎日のトップニュースとなり、韓国内の祭りのな行事や宿泊的な行事などが全て中止となった。韓国内の国内状況を鑑み、韓国内にある日本人の学校でもあるという配慮から、日本人学校も中止という措置は取らなかったものの、延期という形となった。

2年目。今年こそはと始まった宿泊計画だったが、5月に発症が確認された中東呼吸器症候群、通称マーズにより、韓国の現地校が行事を延期する措置を取り始めたため、日本人学校も保護者の懸念も鑑み延期を決定した。2014年度も2015年度も延期という形をとったが、どちらも秋に宿泊学習を行うことができた。外国の土地ではあるが、韓国語上級者の子どもたちが通訳をしながら、スタッフの先生たちとコミュニケーションを図るということも日本人学校ならではの現地理解だと感じた。課外活動では、<スレックライン>木から木へ紐が渡してあり、その上を上手にバランスを取りながら歩くもの、<スポーツクライミング>ロッククライミングと同じもの、<レッペル>別名、降下訓練。軍隊の人などが、高い屋根からひもを使って下りてくるものなど、日本国内では経験できないような体験も盛り込んで行うことが出来た。日本と同じ教育をするために、現地採用教員の協力を得て下見を行い、現地宿泊施設との連絡調整や話し合いなど教師側の努力が必須であった。



スレックライン



スポーツクライミング



レッペル



グループごとの出し物



食堂でのご飯
(子ども向けのため辛い)
<外国語活動>

クラスの絆にチャレンジ

火の神とキャンプファイヤー

5学年を担当した2年間は、外国語活動に力を入れた。外国語専任講師が勤務していたため、担任がT1、専任講師がT2という形で指導した。ソウル日本人学校で行う外国語活動時に気を付けた点は、全て英語で行うということだ。クラスの児童の割合で、半数ほどは海外からソウルに入学した児童であり、数名はインターナショナルスクールからの児童という日本国内ではない状況であったため英語で授業することにした。中学部に至っては、全て英語でディベートを行う授業も参観したため、小学部のうちから耳で慣れる必要があると考えた。

下記は校内研究で行った外国語指導案である。単元名は、「Lesson7 What's this?クイズ大会をしよう」

過程	学習活動	教師の働きかけ	評価と準備
導入	Warming up 1 初めのあいさつ 2 What's this? It's a _____.の確認 3 Key word game	・今までに習った英語の単語表から、単語の名前の確認。 ・児童と一緒にゲームをし、声をかけて、体ほぐし、心ほぐしをする。	・単語表 ・マグネット

<p>展 開</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>6</p> <p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>	<p>Main Activity</p> <p>スリーヒントクイズ大会をしよう!!!</p> <p>クイズの作り方の確認</p> <p>クイズ大会のスリーヒントクイズをグループで作る。 ? Boxから答えになるカードを選択する。 他のグループに聞こえないよう話しを進めることや答えが 分かりにくいようなヒントを出す順番について話し合う。 クイズを出すときの、ヒントを言う担当の順番を決めておく。 一つクイズが完成したら、次のクイズを作る。難しかったなら、 お題を変える。 クイズを出し合う。 ヒント一つずつに対して答えを書き、合計をグループのポイントにする。 ヒントの提示は声のみで、正解が出た時点で、白板に提示する。 三つのヒントがで終わった時点で、全員でWhat's this?と質問し、クイズ出題グループは、解答を全員でIt's a _____と答える。</p>	<p>スリーヒントクイズ大会をしよう!!!</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒントを作る時の注意点を伝える。 ・ヒントの単語は日本語でもよいことを伝える。 ・各グループをまわり、No.1ヒントですぐにわか かってしまう問題や、No.3ヒントでもわから ない問題を作っていないか確認しながら、 助言や支援をする。 ・交流を苦手とする児童には、簡単なヒント を考えればよいことを助言する。 <p>答え方について伝える。 ・制限時間は一つのヒントに対して、15秒で あること、一つのヒントごとに答えを書き、 正解なら1ポイントずつもらえることを伝え る。 ・児童の良い発言やコミュニケーションを楽 しんでいる態度を褒める。</p>	<p>画用紙・サイン ペン</p> <p>友達とコミュニ ケーションをとつ て、楽しんでいる か。 ・「What's this?」 という表現を使 い、相手に質問を しているか。</p>
<p>振り 返り</p> <p>7</p> <p>8</p>	<p>Looking back</p> <p>7 カードに学習の感想を書く。</p> <p>8 終わりのあいさつ</p>	<p>振り返りカードに感想を書くように 指示する。</p>	<p>振り返りカード</p>

4. 韓国の生活について

<韓国の方と触れ合って>

韓国に派遣されるにあたって、「生活は普通にできるの?」「危険じゃないの?」という質問が多く聞かれた。隣国でありながら、過去の歴史問題や領土問題などについて報道されることも多く、複雑な関係であることも事実である。実際に、交流会で伺った学校では、独島(ドクト、日本の竹島の韓国名)の模型が学校に飾られていたり、地図などが掲示されていたりする様子が見られた。小学校段階から領土問題を教育されていると感じた。8月15日の大日本帝国からの独立を祝う光復節(광복절/クァンボクチョル)の際には、一部地域で反日デモが行われる。同日、たまたまバス停で待っていた私の横で、小さな子どもが母親に「あれは、何をしているの?」と質問し、「これはね。」と説明している様子も見られた。慰安婦像に関わることや大使館移転問題など、細かな話題は連日韓国でも報道され関心は高い。

確かに、反日感情が残っている部分があるものの、日本人に親切な韓国の方も非常に多くおり、私

自身に全く不満はなく、逆に好意的な態度に親近感さえ抱いたほどである。

韓国の生活では、自家用車を所有していなかったため、非常に多く張り巡らされたバス、地下鉄と初乗りが3,000W（300円ほど）のタクシーを交通機関として利用していた。現地の人との関わりという点で、タクシーに乗る時には間違いなく交流することになるが、ほとんどの運転手の方が好意的で驚いた。「自分は日本に旅行に3度ほど行ったよ！」と話している方、「日本人は好きだ！」と言ってくれる方、飴をくれる方や自分が今はまっている趣味について語る方などとても好意的で、韓国の現地の方と触れ合うことの少ない日本人学校にとって、一般の方と交流することのできる素敵な場となった。

また、道を歩いていると質問をされるが多かった。たとえ日本人と分かっても道を尋ねられることが多かった。そこから会話に発展することも多々あった。そんな人懐っこい国民性もあるのかもしれないと感じた。

<語学力>

非常に驚いたのが、日本語を話せる方が多いということだ。年齢層が高い世代は、日本の統治下にあったということもあり話せる方が多いのだが、若い世代で話せることが多いことに驚いた。聞くところによると、中学校の段階で外国語の選択をすることができ、その中に日本語も含まれているのだそうだ。世界的にも学力に関する興味関心が高いことで有名な韓国らしいと感じた。日本でも、「K-POP」や「韓流ドラマ」「韓流スター」が世代を問わず広く受け入れられているのと同様、韓国でも日本のアニメや漫画が注目を浴び、興味関心を高めているようだ。現地で知り合った、日本語が流暢な韓国の方は、日本のドラマを見て独学で日本語を学んだそうで、学習意欲の高さも伺えた。

<暖房機器>

北海道出身だから寒さに慣れているし、緯度の関係上ソウルは暖かいだろうという考えは、1年目に覆された。冬になると、日中も氷点下となる日が続き、雪が積もらない分、底冷えが激しく肌を突き刺すような厳しい寒波に見舞われて、体感温度がマイナス10度を下回る日もあった。北海道であれば、ストーブで暖をとるのが普通であるが、ソウルでは3年間“ストーブ”を使わなかった。韓国では、オンドル（온돌）という床下暖房があったからである。床下に管を通し、温水を通すことで部屋全体を温めるもので、暖か過ぎて火を使って暖を取ることを忘れるほどであった。オンドルのお陰で厳しい韓国の冬も快適に過ごすことができた。

<IT環境>

インターネット普及が著しい韓国では、どこにいても無料WIFIがあることに驚いた。日本では、カフェなどではつながるものの、どこでも無料で利用できるというところまではいっていないのが現状である。韓国のこのサービスは、観光客にとっても、インターネット回線が使用できるので便利であると感じた。また、韓国民はデリバリーサービスをよく利用する。デリバリーすることを韓国語で**배달**（ペダル）といい、食事はもちろん、コーヒー1杯やお酒のおつまみ、夜食も配達してもらうことが出来る。携帯アプリに「ペダルの民族」「ヨギョ」などというものがあり、韓国語が分かるようになってきた頃から注文していた。日本では見られないチキンの配達やマクドナルド、海苔巻きなど様々なものが携帯電話のボタン一つで注文することができる。まさに、携帯電話さえあれば、何でもできる環境が驚きだった。

IT 国らしく、携帯電話やパソコンの充電を至るところで行っていた。カフェで充電は当たり前で、地下鉄のホームの電源近くで座り込んでいる若者やバスの中で充電をしている様子も数回見た。文化の違いを感じた瞬間だった。

<食事>

辛いものが好きだったせいか、とにかく美味しい食べ物が多く有難かった3年間だった。アジアということもあり、醤油を使用する料理も多いが、韓国の調味料である、コチュジャンを使用した料理に舌鼓をうった。特に興味深かったのは、一つの料理に関してのお店が集合している〇〇길（キル、〇〇通り）という通りがあることであった。タッカンマリ通り、ユッケ通り、トッポキ通り、などなどそれぞれの地区で特色ある食べ物のお店が連なり、料理を食べたくなったら、その場所に行けば様々な店から選択して食べる事が出来たので、飽きる事がなかった。

5. 最後に

日本とは違う環境で学ぶ子どもたちのために、出来る限りのことを行うという目標をもって派遣された日本人学校。そこでは、家庭の事情で望んできたわけではなかった子どもたちが、その状況を受け止め熱心に学習し、様々な活動に積極的に活動する様子が見られた。先日1年目に受けもった現在中学部2年目になる子から手紙を受け取った。内容は、小学5年生の時に私から言われた一言で、今の自分がありとても感謝しているという内容だった。住所も知らせていなかったのだが、日本人学校に教えてほしいとお願いして手紙を書いてくれたようだった。自分は、日本人学校で何を残せたかと帰国してから考えていたが、この手紙を受け取って、学習面の指導だけが教師には求められているわけではなく、生活や全ての面で子どもたちを支える必要があることを改めて感じた。ある時は親になり、ある時はカウンセラーにもなるのだ。そして、それは日本人学校だから特別といったことではなく、日本の学校でも日本人学校でもどこでも、基本は子どもに寄り添って理解できる教員であり続けたい、そう感じた派遣であった。

他国のよさを知り、改めて日本の教育のよさを知った今、日本の子どもたち、札幌の子どもたちに少しでも自分の経験を還元していく機会を模索していきたいと思っている。

—参考文献—

○ソウル日本人学校ホームページ

○韓国 セウォル号転覆事故 MERS の流行 ウィキペディア